

5 . 専門分野別活動内容

5 - 1 ラ・プラタ大学獣医学部の現状と問題点

本アフターケアにおける協力活動内容は、以下のように大別される。

- (1) 臨床診断技術の改善
 - 1) 血液・血液化学的検査法
 - 2) 眼科的検査法
 - 3) 画像診断法
 - 4) 病理組織学的検査法
- (2) 家畜疾病の予防と治療に対する診断技術の応用
 - 1) 寄生虫・原虫感染症
 - 2) 細菌感染症
 - 3) ウイルス感染症

各活動内容に対するラ・プラタ大学側の活動状況は以下のとおりである。

(1) 臨床診断技術の改善について

血液・血液化学的検査法については主に臨床病理学講座が、眼科的検査法については主に外科学講座と大動物臨床が、画像診断法については、主に放射線学講座並びに内科学講座が、病理組織学的検査法については主に病理学講座が実施している。

1) 血液・血液化学的検査法

家畜病院に来院し、これら検査が必要とされた症例(1日約5～10例)並びに近隣獣医師から依頼のあった症例約30～40例を対象に行っているが、血液検査は用手法で、血液化学検査は旧式の簡易測定装置を用いて実施している。この結果、この検体数に対応することで手一杯であり、物理的な要素からも診断技術の開発、研究を遂行するには至っていない。さらに、本来必要とされる診断に対する助言なども実施できていない状況で、単に測定機関としての役割しか果たしていない。

2) 眼科的検査法

来院した小動物(1日約3～5例)並びに大動物(1日2～3例)について実施されているが、手持ち眼底鏡(外科学講座教授の私物)のみによる診断で、系統立てた診断法とはいえない。さらに、外科学講座で対応しているため、手術に関連する点からのみの検査法に限定されており、本来の意味での眼科的検査法は実施されていない。

3) 画像診断法

X線画像診断並びに超音波画像診断がそれぞれ各5～6例、2～3例について行われているが、いずれも旧式の機器で実施している。特に超音波診断装置は約10年を経過した装置で解像能力は著しく低く、心臓並びに肝臓などの診断には耐えられるものではない。また、現在各種疾病の診断に欠くことのできない内視鏡診断は、機器がないため、いずれの診療についても実施されていない。

4) 病理組織学的検査法

斃死例について病理学講座が実施しており、本来の意味における病理・病理組織学的検査は十分満足行くものであるが、現在の診療・診断に欠くことのできない生検材料に対する病理組織学的検査はほとんど行われておらず、特に内部臓器に関する病理組織学的検査法は実施されていない。

(2) 家畜疾病の予防と治療に対する診断技術の応用

現在のところ寄生虫・原虫感染症については寄生虫学・原虫病学講座並びに免疫学講座が、細菌感染症については微生物学講座が、ウイルス感染症についてはウイルス学講座が実施している。

各項目について、基本的な診断技術の開発並びに依頼検体に対する測定は実施されているが、予防と治療に関しては何ら実施する手段をもたない。これらの点については、これまで、その一部をチャスコムス診断研究センター(CEDIVE)を通じて実施しているが、依頼検体を測定するのに手一杯で、予防・治療に対する指導・助言を行うには至っていない。

5 - 2 アフターケア協力における活動内容

以上のように、これまでのJICAによるプロジェクト活動で、家畜疾病に対する基本的な診断技術の向上・開発は十分な状態にあるが、これら技術を広くフィールドに応用するには至っていない。したがって、本アフターケアでは、ラ・プラタ大学の臨床関連教室(内科学、外科学、放射線学、臨床繁殖学、臨床病理学、大動物臨床、小動物臨床、CEDIVE等)を通じて、これら技術をフィールドに応用することとなる。すなわち、ラ・プラタ大学の臨床関連講座での診療実績(年間約300頭の馬、約1万8,000頭の牛、約4,000頭の小動物)を基に、これら関連講座と連携することで広く、応用範囲を拡大させ、これまでに供与してきた機器を有効に活用し、家畜病院検査部門にこれまで各研究室で確立した様々な診断技術を集約し、再構築することが有用な方法と考えられる。また、基礎講座に関しても開発した診断技術の応用範囲を広げることでラ・プラタ大学獣医学部すべての研究分野の活動を、フィールドからの要請などを考慮したものとし、あるいは様々な検体をフィールドから得ることで、新たな方向で活性化を図れるものと考えられる。

